

笑顔礼讃西東

檜の木句会様(東京都・武蔵野市) 2~3

波京葉支部 未草会様 3~4

犬塚こうすけ様(神奈川県・横浜市) 5

投稿作品 6~9

心に残った作品 10

詠み人スクランブル(冬の新潟といえば?) 11~13

ニユースあれこれ 13

お客様の「リレーエッセイ」 小島知子様 14

新潟ぶらり／中田瑞穂句碑／砂丘館 15

詠み人の「リレーエッセイ」 俳人岸本尚毅様 16

2 February Vol.48

詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇ニユース



様々な古典作品のあらすじをご紹介する「温古知新」。今回は、「伊勢物語」のあらすじをご紹介します。

「伊勢物語」は、みなさんも存知の通り、全一二五段からなり、ある男の元服から死にいたるまでを歌と歌に添えた物語によって描かれています。数行程度(長くても数十行、短くても二〜三行)の短章段の連鎖から構成されています。

昔、男が元服して奈良の春日の里に狩に出かけ、そこに住んでいる美しい姉妹を覗き見してしまいます。思いがけず、寂れた里に不似合いな様子でいるこの姉妹に、男はすっかり夢中になり、そのとき着ていた狩衣(しのぶ摺りのもの)の裾を切り、歌を送ったのでした。

春日野の若紫のすりごろもしのぶの乱れかぎり知られず(春日野の若紫のようなあなたがたの姿に、この狩衣の模様どおり、私の心は千々に乱れています)

この「春日野の…」の歌は、『新古今集』巻一一、恋一、九九四、「女につかはしける。在原業平朝臣」として収録されています。更にこの歌、「みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにしわれならなく(陸奥のしのぶもぢ摺りのように、つれないあなた故にこそ、私の心は千々に乱れることになったのです)」という源融の歌の趣向を踏まえたものだとし、昔の人の熱烈で風雅な振舞いの様子を語っています。

昔、男が自分を世間には無用の人間と思いきめ、京には身をおくまい、東国へ、と出かけていきます。道を知っている人も居ず迷いながら行くと、三河の国の八橋というところにたどり着きました。その沢のほとりて乾飯をたべていると、かきつばたがともきれいに咲いています。ある人が、かきつばたとの五文字を各句の上に置き、旅の思いを詠め、というので、男は、

からころも着つなれにしつましあればはるる来ぬる旅をしぞ思ふ(都には長年馴れ親しんだ妻がい

### 温古知新③ 伊勢物語

るので、はるばると遠くへこまでやって来た旅を、悲しく思うことだ)と詠み、みな涙します。

その後、駿河の国の宇津の山に辿りつき、道中で見知った修行者と出会います。そこで、京に、思う人の所へと手紙を書いてことづけました。

駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり(駿河の国にある宇津の山辺のその名のように、うつつにも夢にもあなたに逢えないことでした)また、富士山を見ると、五月のつごもりに、雪が積もっています。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ(時節を知らぬ山は富士の嶺よ、いつた、今がいつということ、鹿の子 まだらに雪が降り積むのであろうか)更に進み、武蔵野の国と下総の国との間の隅田河にたどり着きます。京から遠くへやってきたと悲しんでいると、渡し守に「早く乗れ」とせかされます。そんな時、珍しい鳥が。渡し守に尋ねると「これが都鳥」というのを聞き。

名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はいややなしやと(その身に都という名を負い持っているのならば、さあ、みな、話しかけてみようではないか、あの都鳥に、わが思う人は、いったいこの世にまだ在るものか、亡いものかと)と詠んだので、船の一行はこぞとて泣きました。

また、この「伊勢物語」というタイトルの由来とされているものに、第十六九段の「狩の使」があります。これは、業平と思われる男が、伊勢の斎宮と密通してしまっ話で、当時の貴族社会へ非常に重大な衝撃を与え(当時、伊勢斎宮と性関係を結ぶこと自体が完全な禁忌であった)、この事件の暗示として「伊勢物語」の名称が採られたとする説も提出されているようです。

物語としても楽しめる「伊勢物語」、数々の業平の歌と比較し、読んでみるのも一興かもしれません。(古川久美子)

# 檜の木句会

常任幹事 望月哲土さま

(東京都・武蔵野市)

ことから「ボロ市」という名前がついたとされていますが、現在では骨董品、日用雑貨、古本や中古ゲームソフト等売る店もあり、約700店の露天が所狭しと並び活況を呈しています。

さて、三軒茶屋駅に集合しいざ出陣！と思いきや、なぜか一行は世田谷城址公園へと。なんと毎月の吟行の前には各人が一品と飲み物を持ち寄り、まずは屋外で狼煙を上げるのだとか。吹雪の新潟から出てきた身には、この青空と冬に外で宴会とは；無論想定外。手づくりの漬物、落味噌、肉巻き、炊き込みご飯、つまみにデザートにフルーツに：と書ききれない品の数々ナビールにサワーに焼酎に熱燗に一升瓶は新潟の銘酒「越乃寒梅」！とくればお断りするのは無粋というもの。ちょうど堅笛の練習をしていた御仁の流れるようなメロディーをバックミュージックに、

東京都指定無形民俗文化財であり冬の季語にもなっている世田谷ボロ市は、毎年12月15・16日、1月15・16日の4日間、東急田園都市線の世田谷駅と上町駅の間で開催されます。「表」に所属し、毎月第3土曜日に吟行を催しているという檜の木句会の「世田谷ボロ市吟行」にお邪魔させていただきました。

「ボロ市」は天正6年（1578年）小田原城主北条氏政がこの地に樂市を開いたことを起源とし今年で432年といえますから、大変な歴史のある世田谷の風物詩です。元は古着や古道具、農具等を持ち寄った



▲東京版「蚤の市」白や杵も売られていた！



▲月に一度のこととて手慣れた様子の皆さま

乾杯が鬨の声となり食べつ飲みつの小一時間。「そのおいなりさん取って」「鼻が垂れちゃったかわしれないわ」「明子さんの鼻なら爪の垢を煎じる意味で

も：」と前回総合点トップの明子さんとの愉快な会話。毎回の吟行も寺社仏閣など慣例にとらわれず、六本木や代官山などの最新スポットに足を運ぶなど、新しい試みが見られているとか。

その後は、招き猫発祥の地であり、桜田門外の変で暗殺された井伊直弼の墓もある井伊家の菩提寺「豪徳寺」へと。招き猫たちは右手を上げていますが、よく見ると3体ほど左手をあげている猫もいてそれを採すのもまた楽しい。2時を過ぎても境内にはまだ霜柱が残り、すぐさま踏みだす方あり「最近見ないわね」「あら朝、犬の散歩の時に見るわよ。早起きしてないんじゃない？」と、この霜柱もきつと句材になるのだろう。

いよいよボロ市に向かうべく乗り込もうとする世田谷線は大混雑。上町の駅を出てすぐに見えるのは人、人…。スリも多いので気をつけてと声をかけられる。それぞれに行動しつつ、最終的には代官屋敷跡を集合場所に。「まけとくよ」「どう、見



▲サクサクと霜柱を…



▲しっかり句帖にメモをとる弘さん



▲サイズも様々な可愛い猫ちゃんたち



▲箸を物色中の女性陣。句材には事欠かない



▲趣味の革細工用の材料を購入する敬一さん



▲ピーク時には1時間待ちの「代官餅」

てつて「詰め放題だよ」の声が乱れ飛ぶ中を、ゆつくりと見て歩：けな  
い！  
それでも、各々興味のある品を手  
に価格交渉をしたり、袋一杯に詰め  
込んでもらったり、俳句のことはそ  
ちのけで(!?)戦利品を手にした既

# 東西讚礼顔笑

に身につけたりしなご満悦。これを買うために来る人もいるという「あんこ」「からみ」「きなこ」3種の味のあるつきたての「代官餅」は既にあんこのみ。長い行列の最後尾にたどり着くまでに押し合いへしあい息ができない事態に。短い凝縮したそれぞれの時間と句材とお土産を携えて代官屋敷跡に集合。座る場所もないので立ったまま一膳の箸で順番に「代官餅」をつつきあう。4時から場所を三軒茶屋「坐・和民」へと移し、第459回榎の木句会が開始。寒さで冷えた身体を温めるべく早速一杯。心地良い疲れと高揚感に包まれながら、あらかたできていた句を推敲し各人が5句提出。幹事の信男さんは俳句に料理にお酒にと大忙し。8句選のうち特選は2句。投句、選句、披講と瞬く間に3時間は過ぎた。時間が限られているため、吟行後には各人が更に10句を作り、それを基に20句を選ぶ誌上句会を行っているのだとか。以下、今日の高得点句から順に。

ボロ市につめ放題という科白 松子  
着ぶくれてつめ放題のやぶ北茶 欽一  
霜を踏む音のざくりと井伊の墓所 信男  
爪弾いて古皿を選ぶ寒日和 七重  
たて笛でピノキオを呼ぶ冬木立 哲士  
招福の猫が肩寄す冬日陰 明子  
ぼろ市の古鏡より覗く明日 万里  
ぼろ市の鏡の中に居るわたし 登季

ボロ市に恐竜のフンうそ寒し 弘  
布団干す窓近々と世田谷線 とく子  
ボロ市の裏が丸見え晴れ女 久子  
霜柱土浮き上がりむず痒い せつ子  
霜柱踏まんと寄れば既に踏まれ 敬一

■「はい、こんにちは」と、初対面なのにとでもフレンドリーな榎の木句会の皆さま。毎月の吟行というフィロドワークを重ねているせいか、どんな状況にも一人ひとりが臨機応変に対応し急なことに戸惑う方はいない。品川水族館の吟行時には、雪が降ってもブルーシートを広げ飲んで食べて俳句を作つて…と、通りがかりの人は不思議そうに見ていたとか。飲んで食べて見て詠んで学んで、また飲んで。東京の真ん中でも、それがどこであったも、俳句を中心し今こころを自分たちの世界となし得る、それはそれは楽しい人生謳歌の会でした。(木戸敦子)



▲選句したり、飲んだり、食べたりと五感をフル稼働

## 波京葉支部未草会

顧問 八重樫弘志さま  
行方素芳さま

上野駅・公園口からほぼ直結している東京文化会館会議室。午後1時半からの「波」京葉支部「未草会」第79回の句会にお邪魔してまいりました。



▲顧問の八重樫さん(左)と行方さん(右)

1時前 1時前に到着すると既に数人は着座して、ほぼメンバーは揃っている。不肖ながら皆さ

まにご挨拶させていただき、早速15分より選句に入る。雅詠2句と兼題は「寒」の詠み込み1句。計3句提出の7句選。30分で選句を終え、45分から披講が始まる。司会の管山さんはテキパキと進行し、時折、的確かつ博識ぶりがかがえるコメントを入れる。披講の宮さんは時々「ひ」と「し」が混ざり、さすが江戸っ子! と妙なところに感動する。

◎本日の高得点句  
9点 つくばひの寒満月を掬ひけり 鎌田

いかにも俳句的な詠み方であった／兼題の「寒」を使った作品の中で何とも華々しい句／お茶の「夜ばなし」の席でこのような経験がある。寒い季節、蠟燭の灯る廊下を歩き手をすすいで茶室に入る、その様子がうまく表現されている／八重樫：上5によつて抽象的になったり具体的になつたりと変わつてくる句。捉え方がうまく穏やかに詠いあげている。

※夜はなし 冬至に向かい夜は次第に長くなる。冬の夕暮れに集まり蠟燭の灯りのなか夕食を共にし、お茶を飲みながら道具の話、一年の思い出などをゆっくりと談じるのにおさわしい茶事が、冬の夜長に設けられた夜ばなし(表千家茶道十二月より)。

7点 動くものみな獣めく冬の闇 松涛

真つ暗なところが獣めくといふのが面白い表現／冬の闇は暗くてじつとりにしている。影を長くして動くもの、それを冬の闇の中で捉えた／行方：よくある句ではあるがきちんと詠んでいる。冬の闇だけに獣めくがよく効いている／八重樫：感覚的な捉え方。冬の闇を無理せず穏やかに納めている。

7点 死亡通知自書と知りたる寒 絹代

自分で自分の死亡通知を出すことがあるのかとビックリしていただいた／この方(「波」会員)はお子さんが早くに亡くなって「私こと〇月〇日に亡くなりました」という死亡通知をお孫さんに託していた／お寺の坊さ

んはよくやる。本当に来てもらいた  
い人だけに書いてお願いしておく。  
その気持ちを考えて「冬ぬくし」に  
していたきたい(とは、さすが日暮  
里の月見寺こと本行寺ご住職の加茂  
さん)／わからなくもないが、私は  
ブーツとするほど寒いと思った／行  
方：知ることによって余計寒さを感  
じたということ／八重樫：受取った  
瞬間の気持ち。死ぬということを嚴  
肅に受け止めた句。

#### 6点 佛像の裏側といふ寒さかな

加茂

佛像の裏という普段は見られない  
ところをよく見て句にした／裏側に  
魅かれた。寒さがびったり／実際の  
寒さと、抽象的な裏側という背かれ  
た寒さが効いている。

#### 5点 裸木となりても王者大樺

太田

堂々としていて新年にいただくに  
ふさわしい句／ごもつともという感  
じ／行方：樺が大きくなり毎年潔  
く葉を落とす様は、たくましく王者  
の風格がある。ちよつと理屈っぽいと  
ころもあるが、いい句。

#### 5点 虎の声聞いて上野の寒牡丹

宮

上野動物園の塀のところを歩くと  
たまにライオンやトラの鳴き声が聞  
こえる。自然に詠んだ句／今年の干  
支の寅、動と静を捉えた句／虎と寒  
牡丹のとりあわせがいい。昔の屏風  
絵が浮かんでその色の鮮やかさもイ

メージできた／実際聞こえたかどう  
かわからないが、いかにも聞こえて  
きそう／八重樫：実際に虎の声が聞  
こえなくても心理的なことで入れて  
構わない。寒牡丹と虎でうまく作っ  
ている。

#### 5点 うちわ太鼓うつ寒行の前のめ

行方

子どもの頃に聞いたが、あれを聞  
くと冬の寒さを思い出す／情景が見  
えてくる／下5の前のめりできちん  
と決まった。

#### 4点 初写真はらから集ひ背のびぐ

野口

面白くてお正月らしい句／お正月  
に久しぶりに親戚一同が集まって、で  
もみんな歳をとって背中が丸くなつて  
：だからなるべく背を伸ばして写真  
におさまったのかしら／親戚一同みな  
背の低い家系というとり方もできる  
／行方：背のびぐせ、で救われた句。

その後、3点句から点が入らな  
かった句まで、すべての句について皆さ  
んでゆつたりとワイワイと検討する。  
年酒酌むわが懺悔録棚にあり 楽人

作者がわかるとホントかいなとい  
う感じがするが、俳諧味がありおも  
しろい／私も作者がわかればいただ  
かなかつたので残念でした(笑)。で  
も懺悔録が棚にあったというのによ  
かつた／あんなに懺悔したのに棚に  
上げちゃったんですよ／棚の上、か  
棚に上げ、にしたら？／行方：懺悔

録何するものぞつて言うわけだね、  
面白い／八重樫：ちよつと言いすぎ  
だよ(笑)ここまで構えなくていい。  
「もぐりつちよ」三度潜りてそれつきり

八重樫

もぐりつちよがわからなかった。

八重樫：かいつぶりのこと。言い回し  
が非常に多く60くらいの方がある。

それがわかると、確にかいつぶ  
りはちよちよと顔を出してそ  
れつきりで、いい句。

#### オへの痕柚子もて嘉みす終ひ風呂

行方

終ひ風呂なので女性の句だと思っ  
た。

行方：乳がんの手術をした仲間がい  
た。柚子湯に入ったときにおっぱいの  
代わりに柚子を：という話を聞き、  
よく治つたねと自分を誉めていたで  
あろう情景を思つて作つた。

嘉みすがとつてもいい。自分自身も  
傷もえらいえらい、よくここまで：と  
いたわっている様子がよく出ている／  
私もかつて乳がんで12月に一時帰宅  
で家に帰り冬至風呂に入った。まさ  
に実感／八重樫：嘉みす、こういう  
言葉はなかなか使えない。ここに年  
功が出ている。

もうなれぬチルチルミチル着ぶくれ  
て

行方

これも行方さんとは思わなかつ  
た。一恵さんじゃないかと／私はな  
れるもん(笑)／八重樫：歳に関係  
なくこういう楽しい句もできるとい

うこと／理想や幸福を求めるチルチ  
ルミチル。まだなれるわよ、行方さ  
んも(笑)／みんななれるわよ。

■点が入らなかつた句に対して、顧問  
の方だけでなく、皆さんが真剣に「代  
わりにこんな言葉を入れたら？」とか  
「そこからは先は自分で考えて」「でも  
この句を捨てちゃだめよ、交通費か  
かつてるんだから」と、嫌味なくスツと  
助け舟を出したり、自分のことによ  
うに惜しみなく知恵を貸す。定刻前  
には自然と始まって、時間が過ぎても  
全部の句をあたるというこの姿勢。俳  
句は遊びという柔らかなスタンスと、  
でもその中で最大限に自分の表現を  
高めたいという熱心な想いが伝わつて  
くる真摯な会でした。もちろん句会  
後は、俳句を着に一杯：の会があつた  
ことも申し添えます。(木戸敦子)



▲写真ではわかりにくい  
けれども皆さん  
皆さんレ!



# 東 西 讚 禮 顔 笑

東京みなと

番傘川柳会

会長 犬塚こうすけさま

(神奈川県・横浜市)



▲お手紙には♪や♡マークもありおちやめな一面も

昨年10月に初の句文集「ヒヨコのつばやき」を出版された、犬塚こうすけさんにお話しをお聞きしました。

■初めての句集ということですが

船乗りだった父は60歳から短歌を始め、90歳の誕生日の記念に歌文集を出版した。そのことを意識しなくもなかったが、今年で川柳を始め、30年が経ち「港」の45周年をきっかけに上梓しようと考えていた。

■30年でもヒヨコですか…

10年も続ければ一応一人前という見方もあるそうですね。川柳を始めて数年で「みなと水府賞」を3年続けて受賞し、その気になればいつでも取れると錯覚していた頃、東京番傘川柳社の加茂如水さんに「川柳の20年や30年はヒヨコ

コだよ」と言われて目から鱗が落ちた。思い上がつてはいけないという自戒の意味で、これからも万年ヒヨコで通そうと思っている。

■句集の反応はいかがでしたか？

「一気に読んだ」とか、「おもしろかった」とか皆さんいろいろ言ってくれたけどお世辞でしょ。「こんな楽しい句集見たことがない」と、あからさまなお世辞を言うてくれた人もいたけど(笑)。まあ後から読み直して、そんなにつまらなくもないかなーと。ずうずうしい？他の方にお願いでして選句をしていただいたおかげです。自分の句は自分ではわからないから。

■序文に犬塚さんの川柳を評して「バードックスの真骨頂」とありました

偽善者ならぬ偽悪者という言葉を提供してくれた人がいた。「目立ちたい一心ですみっこに座る」という句があるが、悪そうにしてええかつこしいだった、目立ちたいくせに照れがあったり。素直に自慢した方が可愛げがあるのに妙に謙遜して嫌われたり。話が回りくどい、とは自分でもそう思う。だから似たように人に会うと、なんでこの人こんな遠まわしな言い方をするんだとイライラ。そして俺はイヤな性格だ



▲句文集「ヒヨコのつばやき」

なーと自己嫌悪(笑)。でも根は人に面白がりたいという気持ちがあつて、昔、大辻司郎という漫談家が「大きくなつて人に笑われるような人におなりでないよ」と言うのを聞いて、子どもの頃に「人に笑われる人に憧れた(笑)。

■いただくお手紙にいつも笑っています

ありがとうございます(笑)。食べた後は眠くなるので、昼寝してから夕食までの時間に書いています。手紙とハガキで10通以上書けば一日のノルマは終了。川柳の方は朝4時頃に起き、頭のすつきりしているうちに欠席投句で依頼されている添削や自分の句を作る時間にあて、昼まではそんな時間。おせつかいなのか親切なのか、1句ずつ丁寧にしないと気が済まない。

■すごい量を添削されるのですね

人間って不思議なもので、できないと思うと知恵が働いて手抜きをする。そのおかげで何とかやりくりがついています。一方、句を作るときは30分と決めると1時間続かない。2時間と覚悟すれば1時間は長くはない。5句作ろうとすると5句は大仕事だけど、20句作るまで続けようと覚悟を決めれば10句は比較的楽にできる。気まぐれで気が向かないと取り掛からない性質だからなおのこと、精一杯に！という気持ちでしないとサボっちゃう。その底辺に自分の力以上のことをしようという欲があるんだね。だから、いつもでも楽にならない。

■これからは？

自分がというよりは、会の成長が優先。会員は増えてほしいし、でも「みな

とファミリ」という言葉をいただいたように、会の和を大切にしながら全体のレベルも上がってほしい。私は、たとえそれが空自信だとしても自分をそこそこだと思っていないと人の句は選べないし添削もできない。そのためにも、生涯ヒヨコの気持ちを持ち続けて、毎日の最大限を積み重ねていきたいですね。

「ヒヨコのつばやき」より

ほほえみに会いほほえみを取り戻す  
結果論かしこし人だなと思つて  
来ないだろう来ないだろうと待っている

うしろ指さす人をさすうしろ指  
加齢です言われなくても知つている  
蝟壺に入つて蝟はほつとする

妻百句妻に見せられない百句  
妻が出かけほつとする戻つてほつとする

★お付き合いの最初のきっかけは、お礼に書いた1枚のハガキ。すぐに返事が来て以来止まらなくなつた。照れ屋さんで、その照れ隠しのために、次々とユニークで皮肉めいた言葉を重ねていく。お手紙でも会話でもボケとツツコミが同居している。お手伝いしているからわかるのだが、お名前を印刷した封筒を1年半で2000枚消費する。気まぐれな割に、その実、一人でも多くの人が少しでもいい川柳ができるよう、ためになる添削をしたい、と毎日惜しみない努力を重ねている。(木戸敦子)

# 投稿作品

※今月も、みなさまから沢山のすばらしい作品を投稿していただきました！  
今後も、みなさまの投稿をお待ちしております。  
次回掲載分は3月15日(月)締切です。

## 俳句

- 1 冬満月平山ブルーをとこしなへ  
小島岳青(新潟県)
- 2 お節セツト作るか買うか夫婦喧嘩  
中川平治(東京都)
- 3 万葉の野をつれてくる吾亦紅  
木山杏理(東京都)
- 4 茶柱を覗く師走の二人かな  
星野三興(新潟県)
- 5 冬構え玄関先に杖一本  
檜山とり子(東京都)
- 6 小鳥来る村の真中に駐在所  
小野寺裕子(宮城県)
- 7 年賀状一姫二太郎写真来る  
大橋恒次(新潟県)
- 8 夜寒さや屈背の吾は貧乏神  
吉田未灰(群馬県)
- 9 考へて考へ抜いて日短か  
松嶋光秋(東京都)
- 10 愛誦の名句を捜す初暦  
千代田栄次(東京都)
- 11 母が手や八重山茶花の毀つ宵  
村木尚(新潟県)
- 12 極月や生活簡素に足るを知る  
井原毬子(東京都)
- 13 鮫鱈の捌く腹よりどつと雑魚  
小西四郎(東京都)
- 14 デバ地下にふるさと探す歳の暮  
松涛千鶴子(東京都)
- 15 弾初めもつれもつれし「越後獅子」  
矢野絹枝(東京都)
- 16 記念日のほどよき香り牡蠣ごはん  
竹本美美子(新潟県)
- 17 背伸びしてカメラに向ふ七五三  
青木涼子(埼玉県)
- 18 初雪の包む犬小屋王亡き  
小林カルロス(山形県)
- 19 初富士は目の前にあり遠きかな  
浜田蛙城(静岡県)
- 20 清新の気をもて松を飾りけり  
大谷茂(埼玉県)
- 21 雲を呼ぶ民話の里の柿すだれ  
棚橋麗未(東京都)
- 22 只今と弾む子の声花八つ手  
山川みどり(山形県)
- 23 小春日や街道筋の六地藏  
佐瀬チエ子(神奈川県)
- 24 埒もなき話のさなか冬の雷  
小林七重(新潟県)
- 25 里川や鮭の遡上の五、六匹  
大場きよし(宮城県)
- 26 大根や幸せ色に煮えてゆき  
内河邦久(東京都)
- 27 お屠蘇飲む歳を重ねて千鳥足  
佐藤佑子(福島県)
- 28 余生なほ耐ふることあり冬仕度  
谷川利子(愛知県)
- 29 辞してまた膝の先だけ炬達にす  
茂岱一声(静岡県)
- 30 今年はや片手袋となりけり  
三津木俊幸(千葉県)
- 31 狐火や隣へ行くも坂の道  
津田忠彦(岡山県)
- 32 井は中身で決る文化の日  
新井竜才(埼玉県)
- 33 年の瀬や流るる雲に天の声  
河合ヤスエ(大阪府)
- 34 風花やうつそみ乗せてゆくらくら  
山東爺(北海道)
- 35 寒夜聴く昭和浪漫の第二章  
川崎洋吉(福岡県)
- 36 春霞矢切の渡し覆いけり  
群丘水木(千葉県)
- 37 畳屋の軒にほつれし秋簾  
三ツ木宗一(東京都)
- 38 紫芋焼いて只今元氣塾  
須田洋子(埼玉県)
- 39 風は塔婆揺らして通りけり  
百花清(埼玉県)
- 40 軒下のぽつくり濡つ吊し柿  
関谷秀二(愛知県)
- 41 新雪に刻むシユプール光の輪  
居原田連星(大阪府)
- 42 カサコソと対話のつきぬ枯落葉  
小俣英之助(大阪府)
- 43 初漕ぎに漣遠くきらめけり  
木下精(大阪府)
- 44 人生の嬉しき誤算牡蠣の鍋  
忍正志(兵庫県)
- 45 朝月夜はるか彼方に宇宙基地  
五十嵐勝敏(新潟県)
- 46 寒紅を引くとき齢ふと忘る  
村松知津子(大阪府)
- 47 古稀越えてそれぞれ趣味菊日和  
中嶋清子(佐賀県)
- 48 焚くこともなく寄せられる落葉か  
な  
松谷砂子(神奈川県)
- 49 献花婆支ふる子も老ひ終戦忌  
稲葉節子(静岡県)
- 50 雪解風父の訓辞のごとく聴く  
大塚正路(福島県)
- 51 極月や庭石にある陽のぬくみ  
乾久子(滋賀県)
- 52 汐騒は鳥の吹き冬銀河  
渡辺嘉幸(東京都)
- 53 小春日や焼肉匂ふ家族釣り  
油谷郷史(兵庫県)
- 54 失恋の歌が十八番の歌留多とり  
山本直子(大阪府)
- 55 知らぬことそれも幸せ花八つ手  
坪田勝秀(鹿児島県)
- 56 入り海の貝の寝息や冬詣  
増本和子(千葉県)
- 57 新潟に旅路の夏が夢のよう  
三浦博(岩手県)
- 58 乙女かと問えばはにかむ冬桜  
野村牟人(東京都)
- 59 無言館に軍靴の幻聴開戦日  
吉村筑紫(埼玉県)
- 60 事故に会ふ友を見舞いし夜半の秋  
栗原啓子(埼玉県)
- 61 師走より一步あるけば除夜の鐘  
暉峻康瑞(鹿児島県)
- 62 月見草沖を見詰めていたりけり  
能條憲夫(神奈川県)

- 63 神の留守トラック二台屠殺場へ  
竹内ハヤ子(埼玉県)
- 64 吾が道を行かんとすれど落葉かな  
新堀鉄朗(東京都)
- 65 裸木の筈山へと返りけり  
野中信夫(東京都)
- 66 初富士や吾が窓枠の中にあり  
寺岡文生(静岡県)
- 67 夫は星冬三日月にさらわれて  
仁科美代子(長野県)
- 68 深閑と麓も抱き山眠る  
佐野しづ子(愛知県)
- 69 袖丈を少し縮めて縫い初め  
平賀たづ子(愛知県)
- 70 倒れぐせつきたる菊を抱き起す  
今井温子(奈良県)
- 71 夕北風咳込む友の面簍れ  
江見太郎(岡山県)
- 72 夢幾重今年こそはと去年今年  
有坂馨園(福島県)
- 73 高台寺ねねに似合し藤袴  
富樫和子(山形県)
- 74 草枯れて藤原京の潦  
佐野和彦(静岡県)
- 75 郵便夫山茶花の白散らしゆく  
堀木和子(大阪府)
- 76 雪降るなか五感緩めて猿ならむ  
池田岬(埼玉県)
- 77 願かけて今年またひくおみくじを  
大橋絵代(千葉県)
- 78 ローン終え天下晴れての煤払  
井上静夫(栃木県)
- 79 自律する妻の返し矢久女の忌  
浦橋克行(兵庫県)
- 80 僧の書く新の一文字年の暮  
清まさじ(静岡県)
- 81 子の友もただいまといふ蜜柑かな  
藤本由美子(兵庫県)
- 82 憂き事のすべてを封じ山眠る  
柴田恵美子(北海道)
- 83 九折や碧き摩周湖冬に入る  
野原香雪(北海道)
- 84 チビチビとスコッチ湖が吠えている  
諏訪杜夫(埼玉県)
- 85 吾亦紅山裾咲きし道しるべ  
杉村美保子(岩手県)
- 86 親鴨の率いる小鴨夕日映え  
高橋透(兵庫県)
- 87 冬めくや小さく見へる母の顔  
早矢仕邦夫(愛知県)
- 88 限界の村に雪中田植かな  
斉藤真一(秋田県)
- 89 タワーより一望千里雪の原  
堀田寿美子(北海道)
- 90 展望に見入る没り日や年の暮  
谷口畔水(栃木県)
- 91 日めくりのスリムになつて師走かな  
大久保アヤ子(東京都)
- 92 初雀不意に光の粒となる  
北村純一(神奈川県)
- 93 帰校児の夕日背に逢ふ冬木立  
神一男(静岡県)
- 94 冬ごもりしてつきにけり怠け癖  
鈴木辰彦(愛知県)
- 95 何はさて此の世の事の年の暮  
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 96 煤逃の仲間と出合ふ理髮店  
羽根田明(神奈川県)
- 97 メジロ二羽さえずりわたる朝日待  
つ  
五味田幸夫(栃木県)
- 98 喪の家にしんしんと降る涅槃雪  
鏡たか子(山形県)
- 99 一水の遠輝きの枯野かな  
浅倉里水(千葉県)
- 100 岩盤を剥がすがごとく牡蠣を打つ  
四宮陽一(京都府)
- 101 師のことは解せず過ぎゆく秋扇  
神作洸江(埼玉県)
- 102 寒き夜の七味一振り掛うどん  
井上匡(大阪府)
- 103 若水と思ひて蛇口磨きけり  
宇田川正雄(埼玉県)
- 104 ほほ多みが話すきつかけ梅咲いて  
長島保子(東京都)
- 105 雪螢手のひら歩くばかりなり  
津布久信雄(東京都)
- 106 冬薔薇の果なげ気ながら散らざり  
し  
大阿久雅子(東京都)
- 107 炬燵にも指定席あり辞書を積む  
吉澤八千代(群馬県)
- 108 笠雲に金の隈取り冬夕焼  
上谷すみゑ(神奈川県)
- 109 月白や阿国の国は山まろし  
湯浅芳郎(岡山県)
- 110 冬仕度人も獣も鳥類も  
沢紅子(岡山県)
- 111 膨みつ枯野に燃ゆる夕日かな  
佐藤君夫(千葉県)
- 112 新年へ太古の音色土鈴買ふ  
勝田久美(大阪府)
- 113 冬至の日横長テレビ入荷せり  
堀井和(神奈川県)
- 114 露むすぶ声なきこゑを真夜中に  
池上秀子(高知県)
- 115 かたくなに生くる証の初日記  
高杉杜詩花(北海道)
- 116 凍の朝襟り立て急ぐ虎落笛  
早川述史(愛知県)
- 117 師走風老いの背中也容赦なく  
渡邊昭雄(東京都)
- 118 木枯の去にたる木戸の開いてをり  
田中敏晴(奈良県)
- 119 花八つ手ツリーに添えて奇をてらい  
延原令岱(岡山県)
- 120 短日の銀座は夜の貌となり  
秋谷静子(茨城県)
- 121 寒明ける心の窓も明けようか  
加藤三陽(埼玉県)
- 122 朝刊の音去りてくる夜明けかな  
木村俊彦(奈良県)
- 123 父母と兄どの星ならむ雪螢  
田島星景子(宮城県)
- 124 優曇華をいちど見たきり年経りぬ  
梅澤鳳舞(埼玉県)
- 125 極月の人を動かす聞き上手  
竹澤茂子(大阪府)
- 126 短日も同じひと日や米を研ぐ  
小田眞佐代(大阪府)
- 127 囲ひして二畝ほどの冬菜畑  
平山千江(岩手県)
- 128 笛鳴らす薬罐の滾り初霰  
磯部力(新潟県)
- 129 雪吊りの縄張り軋む寒波哉  
本間七窪子(山形県)
- 130 小春日や母子手帳受く悪阻の子  
星一子(神奈川県)

- 131 風入れの畳紙に妻の匂ひかな  
佐藤茂三郎(千葉県)
- 132 膝坊の御機嫌次第おらが春  
炭崎博(滋賀県)
- 133 松手入れ音の正しき間合かな  
岩村昇(神奈川県)
- 134 坐りしまま声で用たす冬座敷  
長峰正晴(千葉県)
- 135 手袋のままの握手やそれつきり  
大下志峰(福井県)
- 136 マスクして眼が二三残りけり  
鈴木岑夫(野田市)
- 137 小春日のやうな夫婦となりて終へ  
大窪美代子(大阪府)
- 138 逆らはず風に従ひ落葉掃く  
田中美智子(埼玉県)
- 139 炬話に斟酌いらぬコップ酒  
安藤まこと(岩手県)
- 140 短日やすべて自分の持時間  
高橋裕子(埼玉県)
- 141 葛湯飲むけふ為すことをみな終へて  
藤沢樹村(東京都)
- 142 声もなく頬白にさす寒北斗  
中込茂美(山梨県)
- 143 孫の来て正月の色一変す  
松木建二(東京都)
- 144 白鳥が餌をついばむ冬景色  
佐藤秀子(新潟県)
- 145 極月の曇り息かけ玻璃磨く  
石倉政子(滋賀県)
- 146 年の餅哀愁しかと染み込ます  
安木沢修風(新潟県)
- 147 年の暮れつがなしやと主治医笑む  
藤井春三(埼玉県)
- 148 木の葉散るあたかも順序あるやうに  
今井勝子(新潟県)
- 149 教え子のはや定年とある年賀状  
吉田ひろし(愛知県)
- 150 屠蘇酌むも終生下戸をのがれ得ず  
白鳥光雄(青森県)
- 151 春月や故人の心尚生きし  
柳澤京子(宮城県)
- 152 星空に鐘鳴りひびく降誕祭  
中村和弘(愛知県)
- 153 特認校机十九や冬休み  
佐藤源一(新潟県)
- 154 合図にし黄昏鳥に語り草  
浅沼洋子(神奈川県)
- 155 初夢やがんじがらめの身をさらす  
福岡悟(東京都)
- 156 筆太の寅の一字や年賀状  
古谷力(東京都)
- 157 手探の草も混ざりて七草とす  
阿部幸子(宮城県)
- 158 眉の根に力をこめる半仙戯  
成井恵子(茨城県)
- 159 清貧と言うは易きや大根菜  
吉村充治(埼玉県)
- 160 注ぎあへる屠蘇や至福の顔と顔  
重原昇(新潟県)
- 161 新幹線工事の重機冬木立  
矢澤隆夫(新潟県)
- 162 来し方や夫婦傘寿の年酒酌む  
菅井文男(新潟県)
- 163 老いらしく装うたしなみ初鏡  
岡村君枝(茨城県)
- 164 柚子届く添へし手紙をまづ読みぬ  
小山たけし(埼玉県)
- 165 分かち合う小さき倅せサンタの夜  
萬濃その子(千葉県)
- 166 この翅に綿重からむ雪はんば  
木村貞恵(静岡県)
- 167 冬入日羅漢千眼閉す  
植野無人(兵庫県)
- 168 香煙の中に身を置く初地蔵  
関口修一(群馬県)
- 169 来た道を未だこの道を行く師走  
中山日出子(大阪府)
- 170 里の香を吹きこぼしたる七日粥  
西村けい(茨城県)
- 171 初暦めぐり一瞬とさめける  
藤田照代(岡山県)
- 172 寒風に今日も揺れ咲く薔薇の花  
岡弘子(埼玉県)
- 173 永らへて奉られて屠蘇の席  
片桐ひとし(北海道)
- 174 猫に風邪うつさないでと元氣な子  
田野井一夫(栃木県)
- 175 体内の時計を止めて浮寝鳥  
大井光隆(神奈川県)
- 176 レジ袋提げて山猿初明り  
北野耕兵(千葉県)
- 177 定年やひとさわ響く除夜の鐘  
針生清(千葉県)
- 178 先輩の米寿ことほぐ笑ひ初め  
吉澤昌美(長野県)
- 179 四分の肩叩き付きお年玉  
高垣勝代(大阪府)
- 180 買初に葱と豆腐と納豆と  
杉浦俊雄(静岡県)
- 181 年またぎ熱に負けたる寝正月  
塩田澄子(千葉県)
- 182 臘梅や奥社は小さき石祠  
行方素芳(東京都)
- 183 上司の供オフィスマンの初詔  
駒場京子(神奈川県)
- 184 思ふこと心に秘めて春着かな  
北嶋八重(京都府)
- 185 芝の雪ついでむ鳥の鮮やかに  
長谷部喜代子(大阪府)
- 186 百人一首読み手の声の衰えず  
山崎鶴恵(鹿児島県)
- 187 年の豆撒く吾老いぬ鬼打てず  
吉野成行(愛知県)
- 188 わが街に林立のビル初茜  
佐藤信(神奈川県)
- 189 空う風音におどしの技を持ち  
石川郁子(埼玉県)
- 190 酒飲まぬ夫の配びぬ雑煮膳  
梅津陽子(千葉県)
- 191 母介護否心なしや去年今年  
森崎榮久(岡山県)
- 192 あんちゃんに牡蠣樽職人出征す  
鈴木与平(宮城県)

## 短歌

- 193 人はそんなに弱くない心はそんなに強くないあなたもじきに判るでしょう  
横瀬功(新潟県)
- 194 うしろより肩叩かれてふりむくに呆けたるきみがアカンベーする  
佐々木都(長野県)
- 195 新年の手帳求めて文具店妻はレシピを吾に与へし  
小島秀雄(福島県)
- 196 健康な身体感謝し多忙なる日々

リアーす笑顔忘れず

高須敬(愛知県)

197 訪ねくる人は無けれど鍵はずし朝  
風の中間扉を開ける

寒川靖子(香川県)

198 年男次の巡りに託す夢叶う祈りを  
明日に求めて

秋山貞治(千葉県)

199 掃き清め庭に神社の年賀状宛名無  
き葉に初詣りかな

佐伯セツ子(香川県)

200 ふるえつつ地へ打たれゆく杭見えて  
事務執る窓を終日鳴らす

北岡晃(兵庫県)

201 朝一番朝日をおがみ無事祈る一日  
終えて感謝でねむる

田村淳子(新潟県)

202 盆灯籠廻り続くを見据まつ来年ま  
たとせつに祈れり

今井忠一(東京都)

203 師走半ば山野ようやく雪化粧スキー  
の里も活気づくなり

山本敏順(長野県)

204 借りの世に借りを返して伏せこんで  
すえは蓮花の花と咲きたし

市橋静(新潟県)

205 点滴のぼたりぼたりと落つるたび平  
均寿命追ひ越してゆく

黒澤正行(福島県)

206 千両も万両の実も朱に染まり風に  
ゆれしを窓越に見ゆ

小暮昭司(群馬県)

207 一言のやさしき言葉背にうけて心  
ほのぼのバスを降り立つ

重福幸子(三重県)

208 世の荒み写せるころ御しかねて花  
のいのちを鉄に断てり

鈴木清美(愛知県)

209 レンガ壁波の模様の配されど覆ひし  
苔の姿意に任せて

安部龍太(山梨県)

210 義士祭を雪の降る日となんとなく  
あわてておかし今朝の大雪

田中豊恵(新潟県)

211 古稀過ぎて習ひ始めし煎茶の点前  
雅びの中に理の見ゆ

磯部力(新潟県)

212 お互いに介護疲れの夫婦なり点滴  
の腕組みて抱擁

久保和友(滋賀県)

213 われもまた砂に影引く人となる平  
山郁夫の壁画のまえに

後藤美佐子(長崎県)

214 波散れば岩場はぬれて鉛いろ尖閣湾  
の連なり続く

土屋喜雄(山梨県)

215 越路来て魚沼米のにぎり食べ妻へみ  
やげの笹だんご購う

藤原昭三(滋賀県)

216 三日来ぬメールを今日も待ち侘び  
る受信履歴をすべて消し去り

堀井酔人(茨城県)

217 凍てつきし石畳踏み除夜の鐘撞きに  
登りしふるさとの寺

桑原謙一(群馬県)

218 衰へを嘆かずなりし友の声描きて詠  
みてまだまだ生きむ

吉田ゆき(新潟県)

219 灯油の暖とりおれば厨より栗本尊  
子の「ペチカ」流れ来

椎忠夫(神奈川県)

220 過去を捨て今を生きると決めた日  
に心がゆれるメール届きて

岩崎令子(大阪府)

221 村の雑木自由に切れる世となりて  
薪を焚き暮らす帰郷せし人

浜野タミ(東京都)

222 姿消す雪二殴られど柔か溶かす温  
く蠟梅色の母のくちびる

小黒深雪(新潟県)

### 川柳

223 反省文書く術もなし一日酔  
北村富士雄(新潟県)

224 過去ばかり語る男の寂しがり  
石原字(群馬県)

225 塾行けぬ補助教員を置いてくれ  
大川聡(新潟県)

226 本心はぶれてないかと向かい風  
田澤宏(新潟県)

227 授けしと受けし責任平和賞  
齊藤安弘(神奈川県)

228 雪女出そうな寒さ夜長かな  
工藤昌見(山形県)

229 なんとなくいていなくても温い仲  
小山恵美子(大阪府)

230 夏冬の背広一着という暮らし  
大江秋月(兵庫県)

231 虎の威はとうに失いこた猫  
村瀬憲正(岡山県)

232 貧の国殿はまだまだ脛かじり  
辻升人(東京都)

233 夢を抱く事すら出来ぬ流れ星  
近藤はつみ(福岡県)

234 実るほど所得補償が出る仕掛け  
大竹和男(新潟県)

235 一目惚れああそれからの五十年  
勢藤隆(群馬県)

236 曲折の多き今年の柿をむく  
鈴木義雄(福島県)

237 連続さん己の事は頼かむり  
中森儀雄(三重県)

238 五〇年平和惚けした民主党  
青木日出男(群馬県)

239 正確な軒しつかり今日を生き  
中嶋秀次郎(埼玉県)

240 コンビを頼りに生きる独り者  
大岩歌子(岡山県)

241 壁が邪魔隣の部屋が気にかかり  
山崎一嘉(愛媛県)

242 脳のシワ顔の方にはこんといて  
小林恵子(大阪府)

243 七十代まさかの坂がそばにある  
野田明夢(新潟県)

244 臨終に号泣あたりかまわずに  
藤井北灯(福岡県)

245 クラス会今年限りと言うべり  
羽田桐柳(群馬県)

246 ちよと空六膝の修理は無重力  
森本遊笑(兵庫県)

247 あら嬉しお隣さんは子だくさん  
奥那於子(大阪府)

### ◎前号の訂正

ぬのこづちつけて釣り人時を待つ  
小山たけし(埼玉県)

# 心に残った作品

## 129 鯛雲いつか一人となる二人

中岡昌太(神奈川県)

いつか：ではなくもう一人になつてしまつて淋しい！いつかと言つていられてうらやましい。井原毬子(東京都)・行く秋に人の世をかけての句しじみみと味わえる。三ツ木宗一(東京都)・鯛雲の句を作るのが好きです。この句に鯛雲がぴったり、しじみみと感しました。村松知津子(大阪府)・本当にこの通りで私共もいつか一人になる心にしみる句。廣瀬喜代子(岡山県)・作者は現在まだお若いかもしれませんが私も病む亡夫をかかえていた時つくづく思つていました。その時の淋しさは計り知れませんでした。平賀田鶴子(愛知県)・ほんとにそうだなあ。今を大切にしたいと思わせる句でした。藤本由美子(兵庫県)・自分達もいずれは：との思い。大阿久雅子(東京都)・我家は老二人の生活、しじみみと心にしみました。秋谷静子(茨城県)・生きる上の宿命がよく出ている。とくに「鯛雲」が活きて使われている。鈴木岑夫(野田市)・誰もが経験する晩年の夫婦像を簡潔に言いついてある。田中美智子(埼玉県)・心境が全く同じである。高橋裕子(埼玉県)・いつか一人になる二人

に強い共鳴感を受けた。白鳥光雄(青森県)・仲の良い二人(夫婦か?)が、いづれ一人になる「いわずの雲のように」センチな句に共感します。古谷力(東京都)・「いつか一人となる二人」が実に良い。鯛雲の空と共に深い余韻が。吉田ゆき(新潟県)・どんな仲良し夫婦もいつかは一人になる。「一人となる二人」は言い得て妙。「鯛雲」も利いている。大井光隆(神奈川県)

### 【百句自解】

百句自解するまでもなく、読者の多くの方々は私と同じ生活環境でお過ごしの方が多くとお察しいたします。後期高齢者となつたいま、妻と二人で卓を囲みながらの会話は、先ゆきの無い二人ですから、結局順番の話になるのです。よく二人でウォーキングします。歩きながらふと浮かんだのがこの句です。でもこのマイナス思考は体に良くないと思います。これからはプラス思考で考え、俳句でも「老い」は詠まないことにと考えています。

### 6 老二人阿云です。す夜長かな

伊藤修敬(三重県)

・身につまされました。小西四郎(東京都)・会話がなくても充分に通じ合っている二人の静かな夜がうかがえる。青木涼子(埼玉県)・阿云です。この言葉がいいですね。山川みどり(山形県)・老二人阿云です。すお上手ですね。いいですね。佐瀬チエ子(神奈川県)・お芽出度ございます。

「お前百までわしや九十九まで」。津田忠彦(岡山県)・老夫婦が二人で夜長を過ごす様子がよくわかる句。大塚正路(福島県)・まさに同感「夜長」と「阿云」よくうたったものだ。乾久子(滋賀県)・自分たち二人にも似ているので。松尾正一(岩手県)・老になり、長くつれあったからこそ阿云です。とされる。優しく穏やかな雰囲気。田村淳子(新潟県)・年を重ねた人生上り坂・下り坂まさかの坂道もあつた半生。今では「あ：うん」の伊藤さんと同じ老二人です。大久保アヤ子(東京都)・二人の長い歴史をうまく表現している。長峰正晴(千葉県)・仲の良い老夫婦のおだやかな生活がよく描かれている。ちなみに夫とはケンカばかりです。萬濃その子(千葉県)・いつまで二人でいられようか、あうんでいこう。北野耕兵(千葉県)

### 143 日本の大地過ぎて大根引く

吉野成行(愛知県)

・日本の大地過ぎて、スケール大きい作品である。高須孝(愛知県)・足をふんばり、両手で葉の根本をつかむ収穫の喜びは大地に生きている幸せを感じます。三津木俊幸(千葉県)・筆者の住む田園地帯の風景が目につかぶ。竹内進(愛知県)・日本の大地と大きく表現したことで、大根作りへの情熱を感じ、りっぱな大根が浮かぶ。竹澤茂子(大阪府)・いかに大きい大根だったのか大地過ぎての表現がすばらしい。

阿部幸子(宮城県)・氣宇壮大、氣概や良し。植野無人(兵庫県)・力を入れて大根を引く「大地過ぎて」が心に残りました。山崎鶴恵(鹿児島県)

◎その他にも、こんな句・歌が挙げられています。

201 伏す母の泣きやむを待ちむつき替ふ本能的に恥部は恥部らし

黒澤正行(福島県)

2 燃ゆる間が命をんなと曼珠沙華

井原毬子(東京都)

13 力瘤踊らせて打つ走り蕎麦

和栗痴龍(新潟県)

7 栗拾ひ童心つづくところまで

長谷川ふさを(新潟県)

15 稲熟れて坂東太郎に水返す

吉村筑紫(埼玉県)

18 秋の燈の書架に探せり放浪記

松嶋光秋(東京都)

123 夕空に声をのこして雁の棹

堀田寿美子(北海道)

171 耕してたがやし終えて往きにけり

佐藤秀子(東京都)

229 忘れないようにメモした紙が無い

宮崎正男(群馬県)

236 旅行前荷物出し入れ落ち着かず

岡弘子(埼玉県)

238 きつかけはのど飴一つあげた縁

石原学(群馬県)

※今後もふるってご投稿をお願いいたします！  
なお、作品は原稿通りに掲載いたします。楷書にてはつきりと書き添えたいだくとともに、誤字脱字等くれぐれもご注意ください。

# A Q U E S T I O N N A I R E

## 前回のアンケート

Q.冬の新潟といえは？

やはり、多いのは雪、お酒荒波……。しかし、少数派のご意見に、改めて新潟のよさを感じることができました。

幼い頃、祖母と一緒にこたつに入って窓の外に降るボタン雪をじっと見ていた記憶が甦る（北村富士雄 新潟）／何と言っても雪、三八豪雪のころ上越市に住んでいた。雪がなつかしい（石原学 群馬）／新潟市駅南「けやき通り」の「光のページェント」（大川聡 新潟）／雪、スキー（木村平策 新潟）／雪、好感を持って思い出します 請問邦俊 埼玉）／やはり（切干しです）でしょう（小島岳青 新潟）／ル・レクチエの豊かな香り、寒さ暗さに沈む日常に空に抜けるような希望を与えてくれます（横瀬功 新潟）／一度尋ねてみたい！（木山杏理 東京）／やはり雪（星野三興 新潟）／スキー天国のイメージとお酒（日本一の越乃寒梅？）かな（小野寺裕子 宮城）／トンネルを抜けても雪がない。川端先生も温暖化は予想できなかったか。朱鷺と天地人で有名になったが、やはりスキーを楽しめる新潟が懐かしい（大橋恒次 新潟）／ノッペ汁 具材の味をひとつひとつ生かしている素晴らしい。新潟のこのころ根の一つです（田澤宏 新潟）／雪。さらにはいろいろあつて頭がいっぱい（吉田未灰 群馬）／雪深い土地という印象。冬の新潟について知りたい（松嶋光秋 東京）／昔、先生（軍練教官）が捕虜「新潟」にゴボウを食べさせて、絞首刑になりました。十五才の冬でした（千代田栄次 東京）／萬代橋（神田九十九 東京）／食の陣（村木尚 新潟）／雪？カマ

クラフ？行ったことないのでイメージです（井原穂子 東京）／万代橋よりみる雪景色 松涛千鶴子 東京）／琴曲「越後獅子」をおさらいで弾いた幼い頃を思い出し、角兵衛獅子は寒い地から芸にまわるのをいとし（思い）と思っていた（矢野絹枝 東京）／雁木を張りめぐらしてあった商店街がなつかしい（齊藤安弘 神奈川）／雪、鮭、鉛色の海（青木涼子 埼玉）／学友にスキーに呼ばれたが只一回で終わった（浜田蛙城 静岡）／冬の新潟へは行ったことがないので、これからは非機会を作って吟行したい（大谷茂 埼玉）／信濃川の鮭の美味な事 棚橋麗未 東京）／寒くて雪が多く（佐瀬チエ子 神奈川）／日本の荒波（小林七重 新潟）／雪景色（大場きよし 宮城）／雪と酒（内河邦久 東京）／新潟と言えは美味い（ごはん。雪国のイメージです）（佐藤佑子 福島）／焚くほどに風がもてくる 落葉かな 良寛（五合庵）（工藤昌見 山形）／新潟米のおいしい事。味のれんの米菓もおいしい（谷川利子 愛知）／スキー。もっとスキー人口を増やしたい。約三十年前、越後湯沢駅長として勤務（相馬竹浪 新潟）／吹雪（茂岱一声 静岡）／スキーと、ぎそば（三津木俊幸 千葉）／やはり豪雪ですね 稲葉民雄 千葉）／雪しかあまりよく知りません（小山恵美子 大阪）／山間地は雪が多いでしょうが市内は意外に少ないのは驚きました（津田忠彦 岡山）／雪と夜なきですね（大江秋月 兵庫）／酒と魚（新井竜才 埼玉）／トンネルの先村瀬憲正 岡山）／お米魚沼コシヒカリ（河合ヤスエ 大阪）／雪（白、大好きです）（寒川靖子 香川）／雪、寒風、日本海（辻升人 東京）／佐渡情話（山東爺 北海

道）／川端康成の名作「雪国」の舞台（川崎洋吉 福岡）／とても雪深い所だと思います。又川のきれいな所だとも（近藤はつみ 福岡）／寒そう、雪が多そう（西出敏子 千葉）／あつあつの鱈汁（横村華乱 福島）／雪景色（一昨年、佐渡の金北山に深く感じ入った）（三ツ木宗一 東京）／美味いけんちん汁なつかしく思い出します（須田洋子 埼玉）／朱鷺、トンネル、雪（百花清 埼玉）／雪情報に一喜一憂（大竹和男 新潟）／やはり日本酒、それも冷酒が美味しい！（竹内進 愛知）／「雪国」は四十数か国語に翻訳され、ノーベル文学賞に最大寄与した作品だが、新潟の美女駒子に紅涙を流す文学であると思ひ知らされた（居原田連星 大阪）／今はないだろうが吹雪と轍（木下精 大阪）／貴地へ伺ったことはないが、確か渡り鳥が渡ってくるのか、冬の雪は大変だとか（忍正志 兵庫）／スキーですね（五十嵐勝敏 新潟）／雪（村松知津子 大阪）／新潟はテレビと写真だけ一度いきたいです（中嶋清子 佐賀）／雪以外のイメージがわかず……。ごめんなさい（松谷砂子 神奈川）／スキー、日本海の荒波、銘酒（秋山貞治 千葉）／朱鷺の里、除雪（稲葉節子 静岡）／日本海の荒波（大塚正路 福島）／冬の新潟、関西人にはただただ寒きまるところ。文人の集まる新潟（乾久子 滋賀）／日本海の夕日（渡辺嘉幸 東京）／五十年前、親不知をJRで通った時の怒涛と波の花を思い出した（油谷郷史 兵庫）／新潟生れの遠藤実作曲で、新潟生れの歌手小林幸子が歌う、名曲の「雪椿」で新潟。冬の雪にも負けない、きもつ玉のてか、女性の居るところと思う（松尾正一 岩手）／雪が多いとお困りと思えます（廣瀬喜

代子 岡山）／瓢湖の白鳥（山本直子 大阪）／今年酒新潟ブルース聴きながら（坪田勝秀 鹿児島）／行ったことがないのでよくわかりませんが、まず浮かぶのは雪……。です（増本和子 千葉）／大雪を想像します。こんな雪に朱鷺が舞う姿をみたいですね（三浦博 岩手）／冬の新潟には行った事がないので解らない（野村牟人 東京）／雪女、南国生まれなので逢ってみたい（吉村筑紫 埼玉）／八百年前権力によって流罪された親鸞聖人を思ふなり（暉峻康瑞 鹿児島）／新潟、佐渡、情意に満ちた貴重な地域と思えます。ゆつくりと旅をしたい、日本の古里。「雪の新潟」トンネルを出ると、そこに雪国がある……。能條憲夫 神奈川）／海岸に打ち寄る冬怒涛あの影色が忘れられません（竹内ハヤ子 埼玉）／雪が第一に思い出されます（新堀鉄朗 東京）／冬の長岡つくり酒屋、山本五十六の記念館など印象に残っています（野中信夫 東京）／雪国（寺岡文生 静岡）／荒々しい海。波の花。一度も行った事無いです（佐伯セツ子 香川）／波の花 寺泊のお魚（仁科美代子 長野）／雪（佐野しづ子 愛知）／雪、佐渡おけさ（平賀田鶴子 愛知）／雪とカニかな？（今井温子 奈良）／雪に積る住民の事を思い出す（磯村鉄夫 愛知）／雪吊（江見太郎 岡山）／訪ねたことのない冬の新潟、熟爛で日本海の幸を堪能したい。萬代橋今度こそ歩いて貴女と!!（有坂馨園 福島）／やはり佐渡の荒海（富樫和子 山形）／お酒（佐野和彦 静岡）／雪。雪の少ない関西にあってはあこがれの一つです（子供のように）（か）（堀木和子 大阪）／雪国（池田岬 埼玉）／幻の日本酒「夢」販売店教えて欲しい

です(大橋絵代 千葉)／雪の深さ。土の匂が恋しくなる(井上静夫 栃木)／雪(北岡晃 兵庫)／雪国、雪の宿等、雪を想像してしましますが何んと言っても新潟地震(浦橋克行 兵庫)／農協婦人で新潟へ旅行に。紅葉狩は早いし雪はなし、見渡すかぎり稲刈った跡だけでした(清まさじ 静岡)／吹雪と真つ白な光景(藤本由美子 兵庫)／雪とスキー場(田村淳子 新潟)／「雪国」の駒子。暖冬、湿雪、多雪でも、しばれと寒雪は北海道が上手(野原香雪 北海道)／新鮮な初雪とデカンショ節(今井忠一 東京)／上手ではありませんが「スキー」(勢藤隆 群馬)／天気予報に晴の日皆無に近し(山本敏順 長野)／雪と食べ物、天人(鈴木義雄 福島)／行ったことはないが寒い雪の深い所。行ってみたい(竹本惇子 山口)／鉛色の空、風雪：その中で家族や仲間と過ごす暖かさ(若月理依子 新潟)／北鮮へとられた人への同情やその元を為した日本人へ自らなげく(諏訪杜夫 埼玉)／さびしい風景枯すすきが海岸でリンとしている、「拉致」の問題(杉村美保子 岩手)／カニをたべたい(小田佳代 和歌山)／戦友が居た土地。共に負傷したが彼も帰って北陸銀行の頭取になったが先般死亡(中森儀雄 三重)／雪と白鳥(市橋静 新潟)／昭和三八年の豪雪。雪の少ない関東から見ると良く住んでいるなあとびつくりします(青木日出男 群馬)／温泉、美人とても素的です(早矢仕邦夫 愛知)／雪(斎藤慎悦 秋田)／豪雪というイメージがあります。NHKの天人を見て各々地方に深い歴史があることを知りました(堀田寿美子 北海道)／さあ？人口に増えられた某県のキリタンポみたいなもの等あるのでしょうか？(谷口畔水 栃木)／井の中の蛙でわかりませんが映像等で見るかぎり、雪です(黒澤正行

福島)／雪見酒(北村純一 神奈川)／日本酒も良し川の情景も良しそして新米のお米が美味しい(神一男 静岡)／豪雪(鈴木辰彦 愛知)／バブル最盛期？に妻を連れて寺泊まで買物に出かけたこと(仁藤ひろじ 埼玉)／スキーとのつべ汁(羽根田明神奈川)／北の方の波の華が見たい(常盤しがこ 長野)／雪です。それも大雪(小暮昭司 群馬)／冬の日本海を見たい。雪の中温泉で鮭を食し黙考する(五味田幸夫 栃木)／寒いこと(重福幸子 三重)／日本酒の寒造り(中嶋秀次郎 埼玉)／米のうまさ(矢張り寒い、雪国と云う感じですが鏡たか子 山形)／うーん、やはり雪おろしでしょうか(四宮陽一 京都)／雪深い県と思う。又美人揃いの県ではないかと思う(大岩歌子 岡山)／雪雪雪：(神作洗江 埼玉)／冬の新潟を訪れたことがなくわかりませんが飄湖の白鳥が見てみたい(井上匡 大阪)／雪の郷。スキー。かまくら。お酒。ササニシキ。中越地震(宇田川正雄 埼玉)／鮭、魚沼産こしひかり、雪(長島保子 東京)／のつべ汁(津布久信雄 東京)／鉛色の空(大阿久雅子 東京)／雪、日本海の冬(吉澤八千代 群馬)／雪(上谷すみゑ 神奈川)／隧道を抜ければ雪国だった。いつまでもそのままであって欲しい(鈴木清美 愛知)／寒い佐渡行きの船乗り場、思い出(湯浅芳郎 岡山)／雪、豪雪が新潟県人の粘り(佐藤君夫 千葉)／雪・米・酒・白鳥今年二月に白鳥を見に長靴持参で行きました、晴天で、雪のない市内を(堀井和 神奈川)／かまくら(池上秀子 高知)／豪雪(私の子供の頃の新潟といえは窓からの出入り：(高杉杜詩花 北海道)／婿投げ(安部龍太 山梨)／雪しか浮ばない(早川述史 愛知)／一度佐渡行きたいと思えます(渡邊昭雄 東京)／小生は新潟をよく知

らないのですが一度訪ねたいです。そして萬代橋を渡り、句碑を訪ねて：今年行けるかな？(田中敏晴 奈良)／雪を連想します。天気予報を見ていつも傘、そして雪ダルマが見えます(延原令岱 岡山)／冬の水羊羹(伝統守ってるんですね(武田菜美 山形)／新潟地震。被災者の方々のその後の生活が案じられます(秋谷静子 茨城)／温泉(加藤三陽 埼玉)／雪(田島星景子 宮城)／二十代初め情緒不安定になった時冬夜汽車のつて岩原スキー場と信濃川をみってきました(梅澤鳳舞 埼玉)／雪：特に若い頃やつたスキー(大西敏正 神奈川)／美しい雪景色を思うがそこに暮らす人は大変なんでしょうね(竹澤茂子 大阪)／白鳥の飛来地、積雪の多い所(田中豊恵 新潟)／雪国(小田眞佐代 大阪)／冬の雷、村上の塩引き(平山千江 岩手)／乾鮭(酒びたし、とば、うまいね)(本間七窪子 山形)／冷え込む夜は「男山」を熱燗で。酒の美味さ(星一子 神奈川)／雪の美しい景色(佐藤茂三郎 千葉)／熱燗(炭崎博 滋賀)／中越地震のその後の復興ぶり(と人々のくらし(久保和友 滋賀)／お酒(中林恵子 大阪府)／のつべ(野田明夢 新潟)／雪。冬に限らなければ上杉謙信。田中角栄(岩村昇 神奈川)／酒、熱燗でやる新潟酒は最高です(長峰正晴 千葉)／先ず豪雪が目には浮かぶ、北陸も負けず劣らずだが、新潟には遠く及ばない。新潟＝豪雪日本一の感が深い(天下志峰 福井)／行ったことないので、新潟平野が雪に埋れている風景しか思い浮かばない。1～2月萬代橋に佇む旅、計画中心(鈴木岑夫 千葉)／冬の新潟は先づ雪を思います。その方面には旅行していませんので一度行きたいと思っています。喜怒哀楽書房にも：(大窪美代子 大阪)／雪、そして長い冬、おいしいお米。四、五年前の早春、山

形を旅するために新潟空港に降りました。寒かったです(後藤美佐子 長崎)／萬代橋の冬景色(行った事がないので：(田中美智子 埼玉)／白鳥、白米、雪です(土屋喜雄 山梨)／「北越雪譜」同じ雪国でも冬の重さが異なる気がする(安藤まさこと 岩手)／雪、スキー(高橋裕子 埼玉)／雪(藤沢樹村 東京)／日本海の三角波(松木建二 東京)／白鳥(佐藤秀子 新潟)／風雪(安木沢修風 新潟)／川端文学「雪国」の哀歌(藤原昭三 滋賀)／昭和二十年頃のふるさとの風景、特に上京前のふるさと新潟の雪景色は忘れません(藤井春三 埼玉)／雪を思う(白鳥光雄 青森)／雪、今年はどうでしょうか(柳澤京子 宮城)／シベリアから飛んでくる蒲原平野の白鳥、「飄湖の白鳥」、吉川さんのこと。小学校の教科書にて覚えてたり(中村和弘 愛知)／雪、スキー(佐藤源一 新潟)／ドラマを拝見しましたが様々な人間像が浮びます(浅沼洋子 神奈川)／豪雪(桑原謙一 群馬)／雪(中岡宗治 三重)／四季折々の「お酒」(福岡悟 東京)／赤倉温泉スキー場。若い頃家族スキーをエンジョイしました(古谷力 東京)／萬代橋、高浜虚子句碑(阿部幸子 宮城)／越後湯沢の白銀の世界。昨年一泊し、その空気の清冽さに感動いたしました(成井恵子 茨城)／雪深く、人情厚き堪える土地(吉村充治 埼玉)／スキー(重原昇 新潟)／煮菜の匂い。臭いので敬遠する人も食べるのは好きという人が多い(吉田ゆき 新潟)／戦友会で佐渡。二十年前になりました(羽田桐柳 群馬)／燗酒(冷酒でも可)にブリ大根、のつべ、赤ひげの塩辛(大根の短冊付も良を炬燵に入つて一杯が最高です(菅井文男 新潟)／スキー、雪椿(岡村君枝

茨城／酒とスキー(小山たけし 埼玉)／雪と日本の荒波のイメージ。甘えの許されない厳しい世界(萬濃その子 千葉)／雪(木村貞恵 静岡)／雪(植野無人 兵庫)／雪で大変でしょうね(関口修一 群馬)／豪雪、厳寒(椎忠夫 神奈川)／豪雪、日本海、お酒、憧れ(中山日出子 大阪)／スキー、萬代橋(西村けい 茨城)／雪景色(藤田照代 岡山)／何といつてもうつくしい降りしきる雪(岡弘子 埼玉)／露天風呂につかりながら美味しい雪見酒をいただくこと(岩崎令子 大阪)／やっぱり日本酒ですネ。新年に「久保田」をいただきました(奥那於子 大阪)／上越市の高田地区は豪雪地帯。上杉謙信、直江兼統のこともが偲ばれます(片桐ひとし 北海道)／大雪と酒(田野井一夫 栃木)／安吾の蓬髪(大井光隆 神奈川)／お酒の寒づくり、淡麗辛口のうまさ(北野耕兵 千葉)／冬の新潟には行ったことがありません。一度、夏に佐渡に行った経験しかないので…(針生清 千葉)／糸川街道の大雪、小谷の生れだったので忘れられません(古澤昌美 長野)／雪(高垣勝代 大阪)／雪国。瓢湖。豪雪。寒鰯。…(燗酒。杉浦俊雄 静岡)／大雪。山間の避地で育ちました(浜野タミ 東京)／万代橋のふきぬけるなぐり雪(小黒深雪 新潟)／雪(行方素芳 東京)／雪(駒場京子 神奈川)／日本酒：新潟には美味しい銘酒が多くありますね。そちらへ行って味わってみたいですね(北嶋八重 京都)／海の色、豪雪(山崎鶴恵 鹿児島)／冬季の深雪の頑張り。佐渡おけさの歌声が最近聞けなくてさびしいです(吉野成行 愛知)／雪に埋もれてのお酒はたまりません。でも住むには大変なところですね(佐藤信 神奈川)／スキー場の楽しい雪遊び(石川郁子 埼玉)／雪(森崎榮久 岡山)／地震(鈴木与平 宮城)

# NEWS

あ・れ・こ・れ

## 100歳おめでとうございます!



うれしいお便りと写真をいただきましたのでご紹介させていただきます。昨年11月9日に100歳の誕生日を迎えられたお母様・佐藤ほなみさんの句集をまとめられた、山取芳枝さんからのお手紙です。

一本当に素敵な本ができました。母は『ありがとう百歳』を「うれしい、本当にありがとう」と喜んでくれました。母にとって「抱きしめたい本」になったと思います。お誕生日会の写真と一緒にこの本をお世話になっている皆さまにお届けして喜んでいただきました。心から満足しております。本当にありがとうございました。これからもお仕事頑張ってください 山取芳枝

4代にわたり家族が100歳をお祝いするという喜ばしい写真に、お手伝いさせていただいたこちらが何よりもうれしく微笑ましい気持ちにさせていただきました。ありがとうございました。

## ポストカード「春」シリーズを発売!

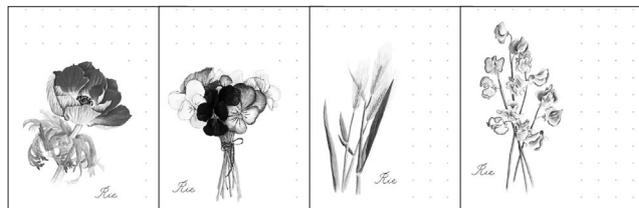
好評をいただいております、弊社オリジナルポストカード。「秋」「冬」に続いて「春」シリーズが完成しました。今回も1枚同封いたしましたので、ご使用のうえお気に召されましたら、同封のアンケート用紙にてお申し込みください。

(1セット8枚入り500円)

春の訪れより一足早く、気にかかっているあの方に、このポストカードで一筆したためませんか。

春…アネモネ、スイトピー、ムギ、ヒヤシンス・黄水仙・ムスカリ、ノビル、タンポポ、ビオラ、オトメツバキ

冬…ウバユリの実、りんご、ローズヒップ、サルトリイバラ、いちい、スノードロップ、シクラメン、雪景色  
秋…松ぼっくり、エスプレッソマシーン、くるみ、ほおずき、きのこ、野ぶどう、コスモス、紅葉



## ホームページのスタッフ紹介を更新

弊社のスタッフ一人ひとりが、今年にかける意気込みを書いたためました。詳細はホームページにてご覧ください。「喜怒哀楽書房」にて検索いただくか、右のURLまで。http://www.eseihon.com

9回目の今回は、前回の久保田陽子さまからバトンを託された小島知子さま。  
俳句との出会いの場面、みなさまそれぞれですね。

# 思いおこせば…

小島 知子

友人が「俳句って楽しいわよ」と、逢う度に眼を輝かせながら語るのを何度か聞くうち、会社の先輩達に「俳句って楽しいんですってよ」と話すと、私もやってみたい、やってみたいと、あつという間に七人が名乗りをあげた。友人に先生を紹介いただき、句会の名は九月にスタートしたので「秋思句会」とした。

私は営業の職場なので担当代理店さんと、数字・数字の毎日。季節感を感じる間もなく連日時間に追われて残業続き。

句会の朝は本郷駅前の名曲喫茶で、手元の句帳に五句そろえるのが精一杯。

最初の句会では「虫」という題ができました。庭や草むらで鳴く声を聴くゆとりもない毎日を過ごしていたので、とっさに浮かんだ句が「見たせば仕事の虫の多かりき」でした。「虫は虫でも違うでしょう」と先生に呆られてしまいました。何度か句会を経験するうちに、通勤の行き帰りに電車の窓から見る景色にも目が止まるようになり、道端の草花にも足を止める余裕が持てるようになりました。

イタリア旅行のバスのなかでしたが、ぜひ一句と言われ、即吟で「ハイウエーミラーへの道天高し」と詠んだところ、あらそれなら私達にもできるわねと、即刻新しい俳句の会が生まれたのは嬉しい出来事でした。

今は袋回しを月一回楽しんでいきます。各人が題を出しあい即吟して袋を廻していくのですが、句としてまともでない時もあり、そんな時は頭の中はもうパニックパニック、くやしい思いも度々です。でも、短時間で思いを凝縮させる楽しさを味わえるとても貴重なひとときです。

俳句は己の心象を映し出す鏡。生き方や考え方が問われ身も引き締まる思いです。

雲の峰練習船の帆の上る

知子

## スタッフの一言

Q. 冬の新潟といえば？



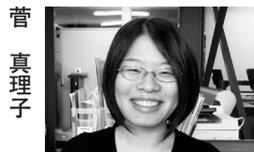
木戸 敦子

「鉛色の空に押しつぶされそうで具合が悪い」という県外出身者。しか〜し！地元民にはあれが新潟の冬のお家芸！「雪国はつらいよ条例」ではなく「雪国はつつ条例」です。



古川 久美子

冬といえば、消雪パイプ！愛知在住の友人が、消雪パイプから出ている水を見るために、わざわざやってきたことが思い出されます。でも、結局友人の滞在期間中は雪が一切降らず、見れなかったのですが…(笑)。



菅 真理子

田んぼに点在する白い物体。餌をついばむ白鳥たちです。冬の新潟では彼らを身近にみる事ができます。



仲由 真実

白菜が甘くておいしい。毎年冬になると母の実家(新潟)から大量の白菜をもらってきます。シンプルに白菜と玉子のお味噌汁で食べるのが好きです。



上村 真智子

自転車通勤なので雪が辛い、たまにアイスバーンの路上も走ります。雪掻きも重労働。でも毎年観ているのに雪の降る様は口マンチックで心を打たれ寒さに身が引き締まります。



金子 ゆり子

なんといっても炬燵。今年の冬は雪が多くて寒いのでなお炬燵が恋しくなります。暖かいのですが、出たくなく怠け者になりそうです。でも雪が多く降ったときの景色は綺麗です。通勤途中で目にした雪が覆った木々は素晴らしい。



石山 由希子

雪が積もった朝は出勤するだけで精一杯。我が家はおじいちゃんが雪のけをしてくれます。気が付くと他所様でも雪のけをしているのはおじいちゃんたち…。おじいちゃんいつもありがとう。



山田 千秋

外はちらちら雪が降る日の家飲みでぬくぬくのこたつに入って、ちーとばか酔っ払うゴロさしてくださいにゃ。



吉田 瞳

やっぱり雪山！スキー場です。山から見下ろす雪景色とパウダースノーの上を滑る感覚は冬の新潟だなと感じさせてくれます。

# 新潟ぶらり

## ★新潟大学医学部 脳研究所敷地内 中田瑞穂句碑

学問の静かに雪の降るはずき

新潟市役所を背にするかたちで、日本海のほうへ向かう坂を上がっていくと、新潟大学医学部がある。その医学部敷地内の脳研究所に、掲出句が刻まれた碑がある。



詠んだのは中田瑞穂。

中田瑞穂は島根県の出身だが、旧制新潟医科大学に迎えられたことがきっかけで来新。のちの京都大学総長である平澤興らと「新潟脳神経研究会」を設立し、脳外科の発展に尽くした人と伝えられる。

彼は、脳外科学者であると同時に俳人でもあった。東京帝国大学在学中、高浜虚子を指導者とした「東大俳句会」で水原秋桜子・山口誓子らと活躍。新潟赴任後も俳誌「まはぎ」の主宰をつとめている。ちなみに「まはぎ」の名は、高浜虚子によるもの。新潟を訪れた高浜虚子に命名をお願いしたところ、前

日に催した句会の題が「萩」であったことから名づけられたという。

私が中田瑞穂と聞いて思い浮かべるのは、そのやさしそうな顔である。初めてお顔を見たのは、ほんぼーと(新潟市立中央図書館)の企画展示であった。新潟ゆかりの文学者の一人として、大きな写真がパネルになって飾られていたのだが、そのとても温厚そうな感じに「なんてやさしそうな人なんだろう」と、すっかり気になる人になってしまった。

掲出句には「雪」ということばが入っているが、なんだか温かいような感じがする。しんと降る雪のなか、穏やかに研究をする——そんな情景が浮かぶ。中田瑞穂は、きつと新潟の冬が好きだったに違いない。(菅真理子)



▲新潟大学医学部。赤い煉瓦の塀と、「赤門」と呼ばれる入り口の二つの柱が美しい(登録有形文化財)。句碑は赤門を入ってすぐ左に折れたところにある。

住/新潟市中央区旭町通1番町757

## ★砂丘館

冷たい雨が降りつく中、旧日本銀行支店長役宅、通称「砂丘館」を訪ねた。重厚な土間のある玄関を通ると、ノスタルジックな洋間の応接室に迎えられる。暖かく明るい照明、時が止まったように静かな空間が広がる。建物や調度品はもちろん、窓からながめる庭園の風景も日常の時間を忘れさせる。



窓辺の向い合ったソファアームに座って、「ここで雪見酒なんてやってみたいねえ」と話す紳士をお見受けし、見知らぬ方でありながら深く頷いてしまったことがある。

砂丘館は、歴代日銀支店長が生活し、また重要な賓客を招く場として使われていた。戦前の日銀支店長役宅で現存するものとしては、非常に希少なものだそう。現在は新潟市が所有し、一般に公開されている。定期的に企画展が催されているので、ぶらりと立ち寄った際にも、思いがけない展示に

めぐり合えるかもしれない。

私が訪ねた日は「ハイカラ古裂明治初期の衣装にみる民のデザイン」が開催されていた。お座敷、居間、茶の間、蔵にも、ユニークな柄の襦袢や布のコレクションが展示されている。それぞれの部屋の床の間にはさりげなく花も生けられている。もてなしの心がありがたい。いただいたパンフレットの「丘の上の家へようこそ」というフレーズにほのぼのしながら、名残惜しく建物を出た。

(仲由真実)



砂丘館(旧日本銀行新潟支店長役宅)

住/新潟市中央区西大畑町52181

☎/025-2222-2676

入館料/無料

開館時間/午前9時~午後9時まで

休/月曜日(祝・休日の場合は翌日)、

祝・休日の翌日(その日が土曜

日の場合は直近の火曜日)、

12月28日~1月3日



詠み人の『リレーエッセイ』

## ああこりやこりや

岸本尚毅

秋さびしああこりやこりやとうたへども 高柳重信  
ああこりやこりや、ああこりやこりや、ああこりやこりや、と  
何回か声に出して言ってみてください。笑いがこみ上げて来  
ませんか。

宴会でしょうか。酔った人がへたくそに踊っています。ああ  
こりやこりやと半分やけくその合いの手を入る人もいます。  
そんな風景を眺めながら「秋さびし」と心の中で呟いてい  
ます。

この句にちよつと悪戯をしてみましよう。

秋さびしああこりやこりやとうたひたし  
秋さびしああこりやこりやとうたふとき  
秋さびしああこりやこりやとうたふゆゑ  
秋さびしああこりやこりやとうたひつつ  
秋さびしああこりやああこりやとうたふ人  
秋さびしああこりやこりやとうたふこと  
秋さびしああこりやこりやとうたふ癖  
秋さびしああこりやこりやとうたふなり  
「秋さびし」が最もしつくりくるのは、やはりオリジナルの  
「ああこりやこりやとうたへども」ですね。淋しいけれど、笑  
える句です。

高柳重信という俳人は、  
身をそらす虹の

絶巔

処刑台

「詠み人のリレーエッセイ」の6人目として今回2月号か  
ら3回にわたりご執筆いただくのは、俳誌「天為」「屋根」  
同人の岸本尚毅さん。どんなお話が展開されるのかどう  
ぞお楽しみください！

のような、ドキッとする俳句を作った戦後俳句の鬼才でした。  
多行形式の作品で有名です。そんな重信にはときとして  
「ああこりやこりや」のような、笑える俳句があります。

### 冷凍魚

おもはずも跳ね

ひざ割れたり

冷凍魚だから跳ねては駄目だと自分に言い聞かせた冷凍  
魚ですが、そこは魚のこと、思わず跳ねてしまいました。可  
哀そうに冷凍魚はひび割れてしまいました。

みちのくも幽霊も秋蘭けにけり

山川蟬夫

山川蟬夫は重信の別号です。「秋蘭けにけり」とは秋が  
深まったという意味です。秋が深まった幽霊とは変な幽霊で  
すね。落語の「へつつい幽霊」に登場する情けない幽霊を連  
想します。

終らぬ序曲

終らぬ序曲

終らぬ序曲

序曲が終らないとオペラが始まらない。大変だ。と真顔で  
言ったら笑えますよね。「終らぬ序曲」を三度繰り返し返して、  
しかも二行目を一文字下げているところが洒落ています。こ  
の句を書いたとき、作者はにんまり笑って「なーんちゃって」  
と呟いたのではないのでしょうか。



2010. 2. vol.48 (2010年2月10日発行/隔月発行)  
●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション  
〒950-0801 新潟市東区津島屋 7-17  
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550  
喜悲哀楽書房 株式会社ミュージズ・コーポレーション  
0120-819-395  
e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

新潟市民なら誰もが世話になった街の中心部の書店「北光社」。惜しま  
れつつ1月末で廃業した。同じ頃、有楽町西武も年内の閉店を発表した。1  
階の雑誌コーナーの前、マリオンの時計の下、いずれもよく利用した待ち合  
わせ場所だ。常なるものはないとわかっていても一種の感慨がわく。帰省した  
友達のおさんぞめく歓声、いいかげんにしてという苛立ち、人を待つ、待たせ  
る場所とともにあった記憶。今は携帯一本で待ちも待たせもしない。甘酸っぱい感情も持ち得  
ない。ゆつくりと…なのか猛スピードで…なのか、でも確実に何かが変わっていく。(木戸敦子)